

かごしま農36景



形質

3年前の第1回フォト農美展に、出張で来鹿中の農林水産省のYさんを案内。作品『寒干の頃』の前で足を止めたYさんは、

「背景の澄み渡った青空と大根干しのやぐらの組合せがいいね」

と語り、後ろに下がって見直し、

「ほ場整備された土手の直線が作品に厚みを与えている」

とお気に入りの様子。傍らの私は、作品の下に見える土手の線でほ場整備を見て取ったYさんの眼力に「さすが農林水産省」と、一しきり感心したことがあった。

都市計画で土地の区画をやり変えたり、道路を整備したりする事業を区画整理というが、田や畑でも同様の事業が行われる。昔、耕地整理、今、ほ場整備と称され、私たちは、農地は元来四画に区切られたものと思っ
ているぐらいだ。だが、そこには牛馬耕用の犁の発達と結び付き、明治期には道路と水路で画された矩形のほ場
を出現させた技術の歴史がある。水路の付いたほ場は用水、排水の管理を容易に、そして排水の改良は「乾田
馬耕」の農法を可能にした。これによる深耕は、多量の肥料の施用と相まって収穫量を大幅に伸ばし、短形
のほ場は農作業の能率を上げたという。

こうした水田の整備のやり方は、現在まで基本的に変化はないが、1963年のほ場整備事業の制度化の頃ま
では、排水の改良や地力の増強に主力が注がれた。今日のような30アール区画に整形されるようになったの
は、それ以降の話である。排水や土壌の改良は、生産量の増加ということではほ場の“質”の問題。一方、区画
の形状や大きさは、生産力に直接関係がない上、外に見えるということもあって“形”の問題といえる。

「人間にとって大切なものは見掛けではないよ。心だよ。」といわれるものの、美人が何かにつけて得なことは
否定し難い。外見的な姿は性格の善し悪しと必ずしも一致しないが、神の加護に恵まれ、両者を兼ね備えた
羨ましいお方もおられる。人間、自らの才色に限らず、物事の多くで、“形”と“質”の両者を兼ね備えたい
と思うのが人の常。

1枚の写真にアクセントを与えたほ場の土手は、更に伸びようとしている。近年区画の大きさを1ヘクタール
以上に拡大する事業が仕組まれ、田畑はスケールの大きい“形”に。そこには、“質”の向上も。新しい
“形”と“質”を兼ね備えた農地を造成する技術は、21世紀に年間労働時間1,800時間の経営を実現
する旗手として登場した。

(1994年8月)

◇「かごしま農36景 / 発行:鹿児島県農業農村整備情報センター」より

文:門松経久

写真:宿利原 重男「秋Ⅰ」第3回かごしまフォト農美展